
会長は・・・

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会長は・・・

【Nコード】

N6933Z

【作者名】

レオ

【あらすじ】

凜架学園、生徒会会長、美原鈴羽。

会長の目つきに生徒たちは引いてしまうほどのクールな目つきの会長。

ある日、放課後サッカー部員で癒しをもらっていると・・・?!

* 第1話*

れいかかくえん
鈴架学園・生徒会会長・美原鈴羽。
ただいま、校舎見回り中。

「こら!!そこ、走らない!」

「今急いで——ひいひい」

あたしはそいつをキツとにらむ。

「口答えしますか?そうですか?」と心の中で

20回ぐらい唱えている間に相手は強歩で

その場を立ち去った。

周りの人もさささあー・・・と引いていく。

ガタンツ

あたしは生徒会室のドアを勢いよくあけた。

「はあ・・・なんだよ、みんなひいちゃってさ」

あたしは一人ぶつぶつといいながら

席に座って書類の整理などをしていく。

今日も書類は山積みで、余裕で放課後までかかりそうだ・・・。

6時間目が終わってから、現在までぶつ通して書類作業中。

さすがに首と目と手が死んできた・・・。

でも、今日やつちやわないとね・・・

書類作業を進めてる途中、ふと校庭から聞こえる声に耳を傾ける。

『るあ!パス!』

『こつちや!こい!』

『させるかあああ!』

サッカー部の声だ。よく声が通っていて惚れ惚れするな・・・

あたしは少し休憩と自分に言い聞かせ、窓からサッカー部を観た。赤Tと青Tで分かれて試合してるらしい。

ここのサッカー部、チームワークがよくて県大会でも何度も優勝している、つわものチームだ。

「はあ・・・癒されるわあ・・・」

サッカー部員たちをみながら窓際に頬杖をつく。

パアツと簡単に部員たちを見てると、一人だけベンチに座って見ている人がいた。

「ちょ・・・やばい・・・イケメンだ・・・!」

あたしはうつとりとその男子を眺める。背、高いなあ・・・
何で試合出てないんだ?怪我してる?

そんなこんなで、5分ぐらいたって

あたしは我にかえる。

「書類作業作業・・・!こんなときに限って何してんだ・・・」

また席に戻って作業を始める。

・・・が、どうしてもさっきのイケメンをまた見たくなくなってしまった。

どうしようもない、この見たい感にあたしは負けた。

あたし以外は知らないけど、あたしはイケメン大好きなのだ。

だから、作業の合間合間にサッカー部員で癒されている。(毎日)

もう一度窓から覗くと、不意にベンチに座ってる男子と目が合いあわあわと窓から首を引っ込めた。

・・・あぶなかつたあ・・・

もう少しで秒殺ところだった・・・

次はしっかり気合いを入れて作業に取り掛かけようとしたときだった。

コンコンッ

あたしはノックで自分をいつもの美原会長に戻した。

「はいつて。」

「失礼しマース」

がらつと入ってきたのは・・・

背の高いイケメン・・・そう、さっき言っただけイケメンだ。な、なんでここに・・・?!

「えつと・・・用件はなに？」

いつものあたしで精一杯答える。

でも顔はいまだにほってつてる。

み、みてたつてばれてない!?!?!

あたしはあたふたしていた。

そして、次のイケメンの言葉に

あたしは思い切り赤面してしまった。

「俺の事ずーつと見てたでしょ?かいちよーさん?」

ぶわあつつと頬が熱くなるにつれて

あたしの鼓動はとても早くなっていた。

第2話

「な、なんのこと？」

とりあえず否定してみる。

けど、多分いや絶対に無意味だ・・・

「否定権無しだろ？さっき俺とめえあったとき
あわあわと顔引っ込めたくせして」

「うっ・・・やっぱ見てた・・・？」

さすがに恥ずかしい。

あたしがイケメン好きってばれたんだよね・・・

「まあ、かいちよーがイケメン好きってのは

だーいぶ前から知ってたけどね」

「は!？」

さすがのあたしも声を張ってしまった。

「なんで知ってたの!？」

「1年のときからずーっとサッカー部員みてただろ？」

「・・・ハイ」

やられた。

ばれてたなんて思いもしなかった。

あれ・・・1年から知ってるって・・・？

「も、もしかして先輩?!」

「ビンゴー」

ま・・・まさか・・・先輩だったとは・・・

「す、すみません・・・」

「なにが？」

「いや・・・なにがってかどこまでも・・・」

「別に俺はいいんだけど。てか、俺の事今日まで知らなかったわけ
？」

「ええ、まったく存じて居りません・・・」

「珍しいな？俺、鈴架学園No1にもてるんだけどな」

「あー・・・すみません、そっち系まったく興味ないんです」

「イケメン好き、なのに？」

「うっ・・・ええつとですね・・・あたしご・の・み！のイケメン好き、なんで・・・」

「じゃあ、俺は会長好みと？」

「Yes・・・」

「くっ・・・会長つて意外と面白いな？」

「さあ・・・そうなんでしょうかね・・・。目つき悪いのに変わりはないですけどね・・・」

「そうか？あ、わかった髪の毛だ」

そういうと先輩はあたしを引き寄せてくるつと反転させて、髪の毛を上げた。

「や、ちよ、せんぱい!？」

ぱちんつと音がなる。

な、何の音!？」

「ほら、くくつたら全然かわいいじゃん」

またくるつと反転させて

ドアで反射したあたしを見せた。

いつも髪の毛をたらしっぱなしのあたしは自分が髪の毛を上げている状態に違和感を感じた。

「どうよ??」

「・・・なんか変な感じですね」

「いつもたらしっぱなしだからだろ」

「まあ・・・そうなんですけどね・・・」

そこからは完璧に沈黙が続いた。

あたしはふと、思ったことを質問した。

「あの・・・先輩、なんでサツカー出てないんですか・・・？
まだ引退ははやいんじゃない・・・？」

「ああ、俺、脚怪我してんだよ」

「へ！？大丈夫なんですか？！」

「まあ、ちよつとした打撲だから。大丈夫」

「なら、いいんですけど・・・」

やっぱり心配だった。

あたしの心の気づいたのか先輩は

あたしの頭を撫でて

「大丈夫心配しないで」

さすがにちよつと恥ずかしくて「書、書類作業に戻ります、お大事に・・・」

といて席に戻った。

「あ、俺ちよつと見といていい？」

「へ?!え、あ・・・はい」

あたしはなぜこんなに不自然な返事をしているのだろうか。
とりあえず書類作業を進めていく。

目の前で見学している先輩がものすごく気になるけど・・・

「サツカー・・・戻らなくてもいいんですか？」

「別にいいんだよ、どーせでないし」

「そう・・・ですか」

・・・戻ってほしいような戻ってほしくないような・・・

面倒くさいこの気持ち

・・・いったいなんなわけ？

* 第3話 *

「そーいえば俺かいちよーの名前知らないな」

「へ?!」

さつきまで沈黙だったのに

いきなり先輩がしゃべったものだから

びっくりしてしまった。

「え?そこまで驚く?」

「あ、いや仕事に入り込んでたんで・・・」

「ほんと、かいちよーは真面目だね。もう少し気楽に生なよ」

「それは無理です。くそ真面目に生きないと世の中たえられないですよ」

「ま、いつか絶対苦しくなると思うけど。そのときは俺を頼りな」

「な、なんでそうなるんですか!」

「だって俺の事好きなんだろ?」

「・・・顔が、ですよ」

何の会話だ・・・これ

どうでもいい話をあたしはべらべらと・・・

「ふ〜ん・・・。で、かいちよーさんのお名前は?クラスも言ってくれ」

「あ・・・美原鈴羽です。2-Aです」

「俺は久仁江田哉也、3-B。あらためてよろしく」

ニコリと笑う先輩に思わず見とれる。

・・・かっこいい・・・

「そんな眼見されても困るよ・・・?」

「!!!!す、すみません!」

「いや、別にいいけどね。てか、かいちよー?もうすぐ6時回るよ?」

まあ、まだ外明るいけどさ」

「6時ですか・・・まだまだ帰れそうにないですね」

「え、何時にかえんの？」

「8時ぐらいですよ」

「え！？学校に許可得てるの？」

「はい、なので堂々と8時までやってますよ」

「でも8時って結構暗いんじゃない？」

「・・・大丈夫、です。どうせ一人なので。」

そう、どうせ一人。

家には誰もいない。

父も母も兄弟も。

「ご家族心配す・・・」

「先輩、サツカー、試合終わったみたいですよ、行って下さい」

あたしは先輩の言葉をさえぎる

「俺別に・・・」

「良いから行って下さい。部活のサボりは許しません。」

ほら！早く行って！！」

あたしは先輩を無理やり廊下に追い出し

ドアを閉めた。

「・・・ご家族なんていませんよ・・・先輩」

だって、あたしの家族・・・

「殺されたんですから・・・」

さすがにやばい。

涙があふれる。

このごろその話に触れていなかった分だ。

あたしはペタリと床に座って泣きじゃくった。

すると、ドアがあいた。

あたしは気にしずにないたままだったけど

不意に後ろから抱きしめられてびっくりした。

「先輩・・・？」

「ごめん、俺のせい。まじでごめん」

「いいんです・・・慣れてるので・・・はやく部活行ってください」
「でも・・・」

あたしは先輩から離れて、先輩に笑いかけた。

「過去は過去ですから、ね。うん、そうです。いってらっしゃい」
先輩は「わかった」といって、生徒会室を出て行った。

あたしはまた、席に着き書類作業に戻った。

「集中、集中・・・」
とにかく集中した。

・・・悲しい過去を見えなくするにはこれしかないのだ。

「後、イケメンを見る・・・」

自分でも怖いほど最近

イケメンが大好きになってしまった。

「先輩なんてど真ん中ストライクですよ・・・」
窓を見てなんとなくつぶやいた。

* 第4話*

「もうすぐ8時回るけど、いいの?」

不意に窓のところから声が聞こえて

あたしは一部の書類を落としてしまった。

「へ?! うわっヤバイ!」

急いでかき集めて拾いあげる。

そして窓のほうを見ると

案の定、先輩がいた。

「お、おつかれさまです」

「お疲れ様、後どのぐらい?」

「あ・・・えと、あとここの書類だけです」

「そつか、じゃあ俺待ってるわ」

「い、いや! いいです、帰ってください!」

「それは個人の自由だろ。」

「でも変える方向別々だと思えますよ?」

「大丈夫、今日俺がいちよりの家とまるから」

「にや?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

先輩の突拍子もない一言に

あたしは思わず変に声をだしてしまった。

思いつきり裏返ってるその声にか

先輩はクツクツと笑っている。

「そんなに驚くか?」

「ああああ、あたりまえでしょ!!!!」

「社会人になればこんなこと日常茶判事だよ?」

「まだ高校生ですーっ!」

「まあまあ、そんなに取り乱すなって。」

「て、てか! なんてあたしに構うんですか!

普通、きもちわるいでしょう？1年からずっとサッカー部員を
目の保養にしているなんて・・・」

最後はすごく小声になってしまった。

いやでも、恥ずかしいものだ・・・

「別に？俺知ってた身だし。最初はこいつなんだ？って思ってたけ
ど、

徐々に違和感もなくなってきたし、今となっては、今日も見てくれ
る？」

思ってサッカーがなされるし？ま、そのせいで怪我したんだけどな
あたしの口からしつかりとした声は出ず

「あ、わわわ！？」とか言う意味不明な言葉しか出なかった。

「それと、さっきの話。俺そついうのまじでほつとけないから」
いきなり真剣な顔になった先輩に

あたしは思わずまた書類を落としてしまった。

「わわつす、すみません！」

「いいよ、俺拾うから」

書類を集めて、にっこり笑って「はい」と渡してもらったときには
あたしの頭の中はパンク状態・・・。

「とにかく、その書類作業終わらせなよ」

「あ、は、はい！ごほつごほつ」

息づいていった言葉の語尾にあたしはむせた。

「ふわああ・・・やっと終わった・・・」

ケータイを開くと、すでに8：30を回っていた。

学校から何も言われないのはあたしの権力って感じかな。

「あれ・・・先輩？」

どこにも見当たらないと思い、先輩と呼ぶと

後ろから「終わった？」と声が聞こえた。

「うわっ先輩、いつのまに後ろに?!」

「だーいぶまえにきたんだけど？」

「あ……すみません、まったく気づいてませんでした。」
「くっ！すごい集中力だな？さすが学年トップの成績だ」
「何で知ってるの!？」
「そこに張ってあったから。」
「あ……」
「ほら、はやく書類片つけてかえろっよ」
「そ、そですな」

あたしはなにを動揺してるのだろうか？
小さいころから友達に男ばかりで
そこからイケメン大好きが発生したものの
男子に緊張することなんてなかったのに……

「ん？どした？」
「いえ……なにも」

この動揺は……なに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933z/>

会長は・・・

2011年12月24日12時46分発行